

〔研究ノート〕

フランス 1920-30 年代の人間／道徳／教育
——「解放へのイニシエーターとしてのバタイユ」に向けて——

宮 崎 康 子

* 問題設定

ジョルジュ・バタイユ (Georges Bataille, 1897-1962) の思想が教育と結びつけて語られることは少ない。しかしながら、学校教育という狭義における教育としての受け取り方ではなく、教育を人間が生きるということと分離不可能な事象だと捉えるときに、バタイユの思想は、教育学にとっても意味を持つものになるだろう。

従来、バタイユの思想は、文学として、あるいは在野における特異な思想としての位置づけを与えられてきた。その彼の思想が正当に評価されるようになったのは最近になってからである¹。たとえば、フーコー (Michel Foucault, 1926-84) は、「限界の体験／哲学」の思想家であるとバタイユを評している。フーコーによればバタイユは、「自分の哲学者としての実体の侵犯を、自分の言語の外側に (外から来た偶発事とか、想像的な行いによって) ではなしに、みずからのうちにみずからの諸可能性の核において見出す哲学者」であり、弁証法的ではない「限界の言語」—— その言語の語り手が行う限界への侵犯行為のうちにのみ展開されるような言語 —— を追求した²。「エロティシズム」や「至高性」、「内的体験」といったタームによって切り取られ語られるようなバタイユの思想の表層における奇異性は、人間の持つ最も基本的な二つの動き—— 禁止とその侵犯 —— の表出に関する思索として理解されるときに、わたしたちが人間を考察するにあたっての新たな足場を切り開くものとなる。バタイユは、ある事物・事象を禁止の対象として設定し、そのタブーを敢えて侵犯しようとするということ、これら二つの動きが互いに相反するものでありながら表裏をなすという〈人間〉の図式を示した。彼にしたがえば、普段のわたしたちは人間性に縛られる「人間」として境界づけられているのであるが、全体的存在としての〈人間〉は、禁止を設けることで動物から「人間」となり、その禁止をふたたび乗り越えることで、分節されない存在として全体的に生きることができる。禁止と侵犯という二つの動きそれぞれへの反撥と魅惑によって、

その両極のどちらにもとどまらず宙づりのまま絶えず往還運動を続けるというバタイユの〈人間〉観は、そのような限界づけられた人間性からの「人間」の解放を促す。

このような、限界の乗り越えについてを執拗に追求したバタイユの思想は、彼の思想がフランスの思想界に異議申し立てを始め、独自の地位を築き上げてきた1920年代の終わり以降、終生一貫している。バタイユの提出する「異義」は、わたしたちの思考様式そのものを、ある境界づけられた枠として認識することをわたしたち自身に要請する。つまり、自分たちが依拠する思考方法そのものの起源を問うのである。それゆえに、彼の思想は、教育のような、子どもを大人社会へと「より正しく」「より良く」導き入れようとするシステムとはかけ離れたものとして捉えられがちである。しかし、大人の思考様式に規定される以前の子どもを境界づける「人間」化の作用が、一般に教育として理解されることを鑑みれば、バタイユの思想は、まさにわたしたち人間の生と不可分なものとして在る教育事象についての考察であると思われる。

この研究ノートにおいて、わたしはバタイユを、「境界」体験を考察の対象とする一連の思想の系譜に布置し、彼を、境界を境界にしているものから人間を解放するイニシエーターとして捉えてみたい。彼の「境界」に関する思想を考察するには、まずは彼の思想を「特異なもの」とみなした状況との対比の中で見ていくことが必要だと考える。そこで、本ノートでは、バタイユの思想を、彼と同時代に、彼と同様に、人間を「人間」として規定すると同時に、その規定を超えることでふたたび〈人間〉へと解放することになる境界の問題に触れた二人の教育者思想家——デュルケム (Émile Durkheim, 1858-1917) とフレネ (Célestin Freinet, 1896-1966) の思想との連関に位置づけることで照らし出し、今後の試みの展望としたい。

* バタイユにみる人間／道徳／教育

バタイユは人間と教育の関係を「超道徳 l'hypermorale」³ の立場から捉える。

最晩年の著書『文学と悪』(1957)のなかで、バタイユは、E. ブロンテの『嵐が丘』における二人の主人公——キャサリンとヒースクリフ——の関係に触れて、「教育」という言葉を使用している。重要な部分なので、少し長いが全文を引用する。

「ギリシア悲劇の場合と同様に、『嵐が丘』の場合にも、掟 [loi] そのものが告発されることはない。ところで掟の禁じているものとは、人間となんのかかわりもない領域なのではない。禁じられている領域とは、悲劇の領域、もっと適切にいうならば、聖なる sacré 領域

である。もっとも、人間性 *humanité* はこれをなんとかしてしめ出そうとしているが、それ
 もただその領域を神聖化する結果にしかなくない。禁止 *l'interdit* は、近づいてはなら
 ないものを崇高化する。それに近づく時には、贖罪を——死を——覚悟しなければならない。
 それでいながら禁止とは、障壁であると同時に誘いでもある。『嵐が丘』の教訓、ギリシア
 悲劇の教訓——ひいては、あらゆる宗教の教訓——とは、計算ばかりの理性的な世界にはと
 ても許すことのできない、崇高な陶酔の瞬間があるということである。この動きはまさしく
 善とは正反対のものだ。つまり、善とは、共通の利害への関心に根ざして、本質的に未来へ
 の配慮を前提としている。それに反して、崇高な陶酔とは、子ども期 *l'enfance* のあの「衝
 動的な動き」もその一種だが、まったく現在のなかにある。したがって、子ども *enfants* の
 教育の際には、現在の瞬間への偏愛は悪の一般的な定義とされ、大人たちは、『成熟し』な
 なければならないものたちに、子ども期の崇高な王国を禁止することになるのだ。しかし、こ
 の未来のための現在の瞬間を犠牲にするということは、たとえそれがいかに不可欠なことだ
 としても、もしそれが究極的なかたちをとるならば、ひとつの錯誤となるだろう。瞬間の領
 域（子ども期の王国）に容易には入りこめることは、危険だから、禁止するのは必然的なこ
 とだけれども、それと同じくらいにその領域をふたたび見出そうとする動きも、必然的なも
 のなのである。したがって、それをふたたび見出すためには、どうしても禁止への一時的な
 背反が必要となる」⁴

このように、バタイユは、子ども期を生きる子どもの瞬間瞬間における体験と、やがては
 「成熟」した大人として社会に参加していかなければならない彼らに求められているものを
 区別する。「人間性」「計算」「理性」「善」「未来への配慮」「大人」「成熟」といった一連の
 有用軸に依拠する生を乗り越える——侵犯する——ものとして、「崇高な陶酔の瞬間」「子ど
 も期」「衝動的な動き」「現在」「子ども」——すなわち、禁止の対象——といった聖性の軸
 に関わるものを提出することで、バタイユは人間の生全体を問題としている。このように、
 人間の生の諸相は、衝動的なものと理性的なものとして大きく二つに区別されつつも、両者
 ともに人間が必然として要求するものである。その両者間の危うい綱渡りのような均衡は、
 有用性に規定された世界観におけるイニシエーションの問題に収斂される。つまり、バタイ
 ュにおいては、禁止と侵犯の問題が、子どもの的な生の在りようから大人の的な生の在りようへ
 と重心がシフトし変容していく境界の問題として「教育」という言葉が選択されているので
 ある。

ここでバタイユが取り上げる「子ども」、「大人」とは実体的なものではなく理念型として

のものであるが、この両者の境界の図式は、動物と「人間」の境界についても敷衍される。つまり、わたしたち人間は、一方で有用性＝人間性、すなわち理性に強く規定されている、言わば「大人」としての存在である。もう一方で、わたしたちの中には至高性に容易に接続する「子ども」的な生の瞬間も確かに存在している。この両者間の境界は曖昧でありながらも乗り越えるのには大きな力を必要とする。すなわち、禁止と侵犯への反撥と魅惑という、その二重化した両者の間で往還する針が、その振幅の幅と強度とによって振りきれ瞬間の力が求められる。そのときに人間の生は、至高性と有用性のどちらもを含むものとして、その十全な姿を現すのだと考えられる。

本ノートで取り上げる 1920 年代から 30 年代という時代は、政治的には第二次世界大戦へと向かう予感を孕んだファシズム体制がヨーロッパに波及しつつあり、経済的には第一次世界大戦による荒廃に追い打ちをかけるようにして起こった大恐慌 (1929) と、当時の日常は秩序立ったものではなかった。日常の解れ目のようにして生起する聖なるものに触れる体験は、たとえばその極限例である死も、日常そのものとして特に顕在化していたと思われる。バタイユの論に立って人間や教育について考察するためには、バタイユの人間／教育／道德観が萌芽した時代状況において捉えるとともに、同時代にあってバタイユと課題意識を共有した二人の教育思想家との連関と差異を明らかにする必要がある。

* フランス 19 世紀末から 1930 年代における教育的潮流

** 日常を活性化する機能としての聖 —— デュルケムの道德教育

19 世紀末から世界的潮流となった新教育運動は、フランスにおいては一部の教育家によって実践、推進されるものにとどまらずに、フランスの教育全体はいかにあるべきかという反省思考を、それまでの人文主義的な教養を中心においていた公教育 la pédagogie officielles に対して突きつけるものだった。全面的に展開する運動であったために、社会体制にまで揺さぶりをかけるものであった⁵。その一環として、従来の宗派主導のエリート養成的な色の濃い公教育に代わる、カトリック的宗教道德ではない道德原理が模索された。第三共和制下で、そのような非宗教性の原則に立つ「神なき」道德教育の定式化にとりくんだのがデュルケムである⁶。

デュルケムは、教育とは若い世代に対する社会化の機能であると明言している。彼にしたがえば、人間には「個人的存在」と「社会的存在」という性質の全く相異なるふたつの存在が不可分な状態で併存している。前者は、個々人それぞれの置かれた特殊な生活環境・出来

事に関する生得的な本能であるために、社会に適応して生きていくには、後者を、その個人が生きる社会が要求する価値に合わせて実現しなくてはならない。そのために教育が必要となる。

「教育とは、社会生活においてまだ成熟していない世代に対して成人世代によって行使される作用である。教育の目的は子どもに対して全体としての政治社会が、また子どもがとくに予定されている特殊的环境が要求する一定の肉体的、知的および道徳的状态を子どもの中に発現させ、発達させることにある」⁷

このように、デュルケムにとって教育とは、「個人的存在」を尊重しつつ、「社会的存在」としての自己をその個人の属する社会に適応させる作用を意味する。しかし、このような道徳-教育観は、社会によって要請される人間を枠づけ形成はしても、バタイユの構想するような、有用性と至高性という二つの軸の交点を動的に生きる人間の生全体を捉えることはできない。

そもそも、禁止と侵犯というバタイユの思想は、デュルケム-モースの未開社会における宗教的世界観に関する研究において見出された「聖なるもの」の概念に触発されたものである。デュルケムも、当然のことながら、有用性に収斂されない至高性の存在に気づいていた。しかし、デュルケムは、俗 *profane* から分離されたものとしての聖 *sacré* の存在を指摘するが、その区分は宗教によって無限に可変的であるとしつつ、聖なるものの持つ至高性は、社会の成員間の結合力として有用に機能するという視角から論を展開する⁸。ここには、有用性に対する至高性という対立図が表されている。もっともデュルケムは『道徳教育論』（1925）において、カント（Immanuel Kant, 1724-1804）の道徳哲学に依拠しつつ、わたしたちの生きる有用性の世界と、これを超越する至高性の次元の複雑なせめぎあいの内において、どのようにして新しい道徳を形成するのかという問題に正面から取り組んでいる。しかし、機能に還元されてしまうこのような図式は、わたしたち人間の生のごく一部を静的に切り取ったものではないだろうか。有用性のうちにおいて、有用性に至高性を対置させているに過ぎない。

これに対して、バタイユは、有用性をことごとく侵犯するものとしての至高性を描き出すことで、侵犯によってもたらされる秩序の崩壊と混沌のただ中にとどまって、その瞬間における動きを動きそのものとして極限まで思考しようとする。侵犯し破壊する力を秘めたおそろしいものであるがゆえに、至高のものはタブーとして禁止の対象となるのである。そして同時に、その力の圧倒的な強さは魅力ともなって侵犯したい／されたいという欲求を掻き立て

る。このような矛盾した二つの強い欲求は特殊な状況下でのみ生起するものではない。有用性を超える至高性の次元は日々の生活の中にすでに存在している。分節できない瞬間の絶え間ない交錯が日常なのである。

****「爆発」／「解放」としての活動——フレネの「仕事」／「遊び」**

フランスにおいて新教育の優れた実践家は、日常の生活すなわち日々を生きることと教育の意義や必要性との連携を目指すプロレタリア階級の側から生まれてきたと言われる。そのような在野の実践家のひとりにフレネがいる。フレネは、農村のプロレタリア的学校が置かれている貧困の現実のなかで、新教育の理論や成果を取り入れた実践をどのようにして行かかを自らの課題とし、「印刷機を学校へ！」という象徴的なスローガンを掲げてテキスト中心の教育に反対した。

「教科書」と題した論文において、彼は「教科書は愚鈍化の一手段である」と述べ、無自覚な教科書礼賛の危険性を指摘する。なぜなら、ある教科書を礼賛するにせよ、批判するにせよ、そこには教科書というものの権威に対する疑いはないからである。それは、無自覚のまま盲目的に教科書を一つの「掟」とし、それを盲信するようなものである。教科書は、子どもたちだけではなく、「教師たちをも奴隷にする」。しかし、教科書はその時代、その社会の支配者階級によって作られたものである。そのような「ある」社会の「ある」道徳の是非を問わないのは奇妙であり、危険なことではないだろうか。それは実学を求めるとともに、子どもひとりひとりの個性を尊重するという新教育のスローガンにも逆行する。フレネはこのことを次のように批判している。

「[教科書を学習することによって] 子どもはすでに他人の思考の型にはめられ、徐々に自分自身の思考を殺してゆくことになる。これは大人への強制的隷属である。われわれは教理問答の問いと答えを暗記させる司祭様と同じことをやっているわけだ。このようにして子どもを高める (élever／育てる) ことができるわけではない」⁹

近代以前には、神という絶対者の言葉に自らを同化させていくための教理問答のように、前提された問いとその答えを覚え込むことにより社会の望む人間(性)を形成しようとした。このことと同様に、教科書を絶対視して疑わないままに教育を行うのなら、新教育の理念である児童中心主義ではなくなってしまう。フレネはこの問題を、唯一絶対のものとして盲信されそのテキストの内容が取り沙汰されることはあっても、テキストそのものの存在は自明のこととしてすんなりと受け入れられてしまう、そのような在り方自体の是非を問う能力の

育成という方向に向かわせる。「学校印刷機」「自由テキスト」といった、子どもの自発的な活動から生み出された彼の教育実践は、やがて「仕事の教育」の理論へとつながる。フレネにしたがえば、学校の仕事とは、必ず「仕事＝遊び Travail-Jeu」とならなければならない¹⁰。有用性を生み出すか否かという点で仕事と遊びは区別されるが、フレネの考えでは、子どもの本能が求める活動に即した仕事と遊びとは境界が曖昧で区分できるものではないし、だからこそ教育を行う際の出発点で慎重さが要求される。フレネは、仕事を有用性を生み出すために強制される痛みや苦しみであり、そのアンチテーゼとして遊びを休息とみなす仕事／遊びという一般的な認識の根源を問題とする。

「もし喜びにも勝る苦痛があり、休息以上にわれわれが求めたくなる疲れがあるなら、またもしその仕事そのものの中に遊びの要素があるため仕事で十分満足できるとすれば、面倒なことなど、どこにもないようになるでしょう」¹¹

このように述べ、フレネは、子どもにとっての「一種の爆発」「解放」¹²であるような、遊びと分離不可分なものとして、仕事を「人間的活動と生成 *devenir* の中心」に据える¹³。子どもの本能的な衝動を爆発あるいは解放させる遊びとしての仕事——「仕事＝遊び *travail-jeu*」あるいは「遊び＝仕事 *jeu-travail*」という発想——が、フレネ教育の原理として置かれている。というのは、フレネにとって子どもとは、「自分自身に没入している時、動物として、また大多数の大人もそうなのだが本能的な行動と本能的な過程の中にとどまっている」存在であり、したがって、教育者の仕事は、「この本能を種の本源的姿として尊重し、活用しなければならないが、また同時に、そこにゆるやかに、念入りに、しっかりとわれわれの世代のしるし——寛容なものであってほしいが——を刻みつけ」ることにあるからだ¹⁴。子どもの「本能」——至高性——を「尊重」しつつ、しかし、できる限り「寛容」ととはいえ、「世代のしるし」——有用性——を子どもに刻み込むことが必要だとされている。有用性によっていかに至高性を制御できるかと考えざるをえないところに、フレネの「教育」者としての葛藤があらわれているように思われる。

* バタイユにおける「境界」という思想——今後の展望

従来、デュルケムやフレネは、有用軸における教育理論家あるいは実践者とみなされてきた。しかし、両者ともにそのような地平だけにとどまるものではない。デュルケムにおける聖性や、フレネにおける子どもの生などは、ともに有用性や機能に収斂されるような人間性の世界を超える至高性の地平を描き出している。それなのに、そのような至高性の地平は、

有用性に規定された次元において語られ、機能に回収されてしまう。デュルケムもフレネも、結局のところ制度と共犯関係を結ぶのである。

それに対してバタイユは、徹底的に異なるものを追求する。人間は至高性のみでは生きられないが、有用性だけに縛られてもまた生きられない。有用性は絶えず生活全般を規定し続けることで、その規定する端から解れていく境界を境界たらしめ、至高性はそのような有用性の解れ目から侵犯をくり返す。有用性と至高性とはそのような境界をめぐりせめぎあう互いにまったく異質な生の在り方なのである。

このときの境界とは、内と外として語られるような境界ではない。境界しか存在しないような境界を意味する。そのような境界においては、すべては曖昧模糊とした混沌であり、絶えずその境界性にさらされ続けているのがバタイユの考える〈人間〉であり、わたしたちの生きる日常そのものである。だからこそその不安定さに耐えられない人間は、自分のいま在地平の内に一時的な境界を打ち立て、辛うじての安定が想定されたその内部に人間性を閉じこめる。またそのため反対に、自ら打ち立てア・プリオリなものとして処理している境界を打ち壊そうという動きも、〈人間〉のうちには初めから内包されているのである。境界の内も外も、境界という実体もない、ただ混沌としての「境界」をバタイユは徹底して追及している。このようなバタイユのフィルターを通してデュルケムやフレネを見るときには、彼等に対する従来の捉え方とは違う視角が開けてくるのではないだろうか¹⁵。

バタイユの思想は、聖／俗というような図式を許す思考方法では捉えられない、言わば思想の「異者」として扱われるべきである。聖／俗あるいは至高性／有用性の軸の交点——「境界」——のただ中に身を晒し続ける動点としての〈人間〉の姿を、彼は考察する。このように、往還運動の振幅と強度とによって、自らの人間性を超出する瞬間の体験を追求したバタイユの思想は、機能1から機能nへのバージョンアップというような発想で捉えられるものではなく、むしろ完全なる機能停止が起こり、機能や、機能が従事する目的性、さらには、有用性までもが不全となる地平へとわたしたちを誘おうとするものである。禁止という境界を設定することで獲得された人間性は、その侵犯を必然として持たざるを得ない。自ら設定した境界を再び無化して全体性を取り戻すために、境界を超え出ようとする。このときに境界線として機能しているのは、禁止を設定する人間性——道徳——である。この意味で、バタイユは、人間性を基礎づける道徳が侵犯され、境界が無化されることで、わたし自身が「境界」そのものになってしまうような至高性の次元の道徳——「超道徳」——の立場に立っているのである。

境界が無化する瞬間の体験をいかに語り伝えるかという課題にバタイユは終生取り組んだ。発達や有用性といった水平軸だけでなく、至高性へと日常を突破する垂直軸だけでなく、その二つの軸の接点に在る〈人間〉として、わたしたちの生を「その十全な姿」で捉えることに苦心した。その試みは、後年、「文学」を語る語り口の問題として主要な関心事となっていく。至高性そのものとなる瞬間の体験を語る語りを、日常の有用性の次元においていかに創出できるか、テキストとしての語りをどのようにして「生きた」ものにするのか、という問題意識をバタイユは常に抱えていた。このような彼の問題意識を共有することは、バタイユをイニシエーターとして、生の全体性へとわたしたちの意識を解放する契機となる。このとき、解放へのイニシエーターとしてバタイユを教育の文脈においても捉えることが可能となると思われる。

今後は、禁止と侵犯の動きの総体として人間を捉えるこのようなバタイユの思想を、1930 年前後の教育分野において、有用性の規定を絶えず逃れ出るものとして、きわめて個人的なものである身体がどう取り扱われてきたかという問題や、理性の網の目を侵犯する実践としての知という観点からも深めていきたい。バタイユのフィルター越しに見えるデュルケムやフレネを経由して再度バタイユを見ることによって、バタイユもまた違って見えてくると思われる。その際に手がかりとして考察すべき文献に、すべてを有用性という戦略から読み解く M. フーコーの『監獄の誕生 — 監視と処罰 —』を初めとする一連の著作、あるいは、そのような戦略の網の目をかいくぐり、ときにはそこへと急襲をかける「隠れ作業」や「戦術」を見る P. ブルデュー (Pierre Bourdieu 1930-) や M. セルトー (Michel de Certeau 1925-1986) らの実践における知の問題を扱った著作などを考えている。

本ノートで概観したように、バタイユの思想は、有用性に収斂することのない、思想の異者として在り続けるための強度を持っている。1930 年代から一貫して変わることのないバタイユの思想を、その端緒となる時代において、個と共同体論、宗教論、社会論、身体論など、従来語られてこなかったような同時代の思想との対比を通してさまざまな視角から考えることで、1920-30 年代がわたしたちにとっての新たな姿を表すのではないだろうか。また、バタイユの思想を大きな流れの中に位置づけることにより、その思想の強度が現在のわたしたち自身を語る際にも意義のあるものであることを示す新たな地平が開かれると考える。

✦註

- 1 M. フーコー「侵犯行為への序文」(1963)、J. デリダ「限定経済学から一般経済学へ」(1967)、M. ブランショ『明かしえぬ共同体』(1968) など、主にフランスのポストモダンの思想家らによって評価されている。
- 2 M. Foucault: Préface à la transgression., *Critique*, août-septembre 1963. (M. フーコー「侵犯行為への序言」豊崎光一訳『パイディア』第8号 竹内書店 1970 P. 137)
- 3 Bataille, G., La littérature et le mal (1957), *Œuvres complètes* IX, p. 180. (『文学と悪』p. 31)
- 4 *Ibid.*, p. 179-180. (同 p. 30-31。訳は一部変更した。また、[] 内は筆者による。)
- 5 石堂常世「二 フランス」「新教育理論の学問的基礎」『新教育運動の理論』長尾十三編 明治図書 1998 p. 28
- 6 社会学者として名高いデュルケムは、第三共和制のスローガン「世俗的教育」の基礎理論として 1887 年以来開講されていた「教育科学」講座の後任に指名され、1902 年以来終生、ソルボンヌ大学教育科学講座において社会学と教育学を平行して担当した。
- 7 E. デュルケム『教育と社会学』佐々木交賢訳 誠心書房 1990 p. 58-59
- 8 E. デュルケム『宗教生活の原初形態 上』古野清人訳 岩波書店 2001 p. 86-87
- 9 C. フレネ「教科書」『仕事の教育』宮ヶ谷徳三・C. フレネ 明治図書 1986 p. 116-118
- 10 C. フレネ「仕事の教育(抄)」『仕事の教育』宮ヶ谷徳三・C. フレネ 明治図書 1986 p. 206 ([] 内は筆者による。)
- 11 同 p. 185
- 12 同 p. 155
- 13 同 p. 188
- 14 同 p. 209
- 15 そのような読みの試みに、たとえば、J-C. フィュー「プレゼンテーション」(『デュルケムの教育論』所収) や、フレネをバシュラールと関連させて論じたものに津田園女「C. フレネにおける“la vie”について——「水」(de l'eau) のイメージに依拠して——」(東京大学大学院教育学研究科教育学研究室紀要第 28 号 2002.6.所収) などがある。

✦参考文献

- ・Bataille, G., Les Cahiers de *Contre-Attaque* (1935), La littérature et le mal (1957), 1970, éd. Gallimard, pour les extraits des Tomes I et IX des *Œuvres complètes*. (『物質の政治学 バタイユ・マテリアリストⅡ』吉田裕訳著 書肆山田 2001、『文学と悪』山本功訳 筑摩書房 2001)
- ・C. Freinet; L'Education du travail, 1960, éd. Delachaux et Niestlé (『仕事の教育』宮ヶ谷徳三訳 明治図書 1986)
- ・Surya, M., *Georges Bataille La Mort A L'œuvre*, 1973, éd. Garamont., (M. シュリヤ『バタイユ伝

上・下』西谷修・中沢信一・川竹英克訳 河出書房新社 1991)

- ・C. フレネ『フランスの現代学校 シリーズ・世界の教育改革 7』明治図書 1979
- ・E. デュルケム『宗教生活の原初形態 上・下』古野清人訳 岩波書店 2001
- ・E. デュルケム『道徳教育論』麻生誠・山村健訳 明治図書 1964
- ・E. デュルケム『教育と社会学』佐々木交賢訳 誠心書房 1990
- ・E. デュルケム『フランス教育思想史』小関藤一郎訳 行路社 1981
- ・E. フレネ『フレネ教育の誕生』名和道子訳 現代書館 1985
- ・J-C. フィュー編『デュルケムの教育論』古川敦訳 行路社 2001
- ・Ph. アリエス『「教育」の誕生』中内敏夫・森田伸子編訳 藤原書店 2003
- ・東京教育大学教育学研究室編『教育大学講座 4 西洋教育史』金子書房 1950
- ・長尾十三二編『新教育運動の理論』明治図書 1988
- ・松島鈞編集『現代に生きる教育思想 3 ― フランス ―』ぎょうせい 1986
- ・矢野智司『自己変容という物語 生成・贈与・教育』金子書房 2000

(みやざきやすこ 京都大学大学院教育学研究科博士課程)